

奏音くんの日常！

彼方紡ぐ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

咲き続けるアネモネの花。

金糸梅から桔梗、菊を経て山桜へと受け継がれた意志パトーンをそれは眺め続ける。

ただ■■■■として。

何てことは奏音くんには関係なく。

彼はただクラスメイトや先輩に頼れる人達と何時も通りの日常を過ごすだけなのだ

！

これはそんなお話

目次

番外編

少し昔の話

結城友奈の章

ある日の朝のこと

ある日の昼のこと

影ときどきサンチヨ

1

6

14

24

番外編

少し昔の話

バレンタインという習慣がある。

旧世紀より続くその行事は杏姉曰く女性が気になる男性に心に秘めた想いをチョコに込めて贈る日なのどうか。

最もそれ以外にも日頃の感謝の気持ちの表れとして、チョコ以外のものを贈る事もあ
るらしい。

まあ、そんな感じの外国由来の行事らしいけど何故そんな事を考えていたかとい
うと。

何を隠そう今日は2月13日、つまりバレンタイン前日なのである。

商店街もそれに因んだセールやフェアを行っており、何処か少し浮かれた空気が漂っ
ていた。

最も皆曰く、自分達が小さかった頃に比べれば下火らしいが自分にはその違いは良
く分
か
ら
な
か
つ
た。

いつもならずぐ近くにいる若葉姉達も今はその気配を感じられない。

暇だなあ……

『それについてはタマも同感だな』

……ねえ

『どうした、タマの方をじつと見たりして』

球子姉は皆のところに行かなくて良いの？ もしかして料理が得意じゃないとか？

『いや、タマはそこそこ出来ると思うぞ！ ただ、奏音を一人にするのもなと思つてな』

そっか、ならゲームでもやって時間を潰す？ 球子姉とやろうと思つて買った新作

ゲームがあるみたいだから。

『本当か！ ならタマと一緒に遊びタマえ！』

いえーい！

そうして早速球子姉と一緒に遊び始めた。

ゲームは千景姉が薦めていただけあつてとても楽しくて、そのためか長時間やり込み過ぎてしまったのかいつの間にか寝ちやつたみたい。



そして迎えたバレンタイン当日、学校を終えて帰ってくると自分の部屋の机にラッピ

ングされた6個のチョコが一通の手紙と一緒に置かれていた。

チョコ自体も気になったけどまずは手紙の方を見てみる。そこには……

ハッピーバレンタイン、これが私の気持ちだ。

美味しく食べて下さいね？

タマのチョコをありがたく受け取りタマえ！

少し凝ってみました。後で感想を聞かせて欲しいです。

皆で一緒に作ったんだ、美味しく食べてね！

日頃の感謝の気持ちよ、受け取って。

……ありがとう、みんな。

言いたいことも言うべき言葉もたくさんある。それでも今はそれしか思えなくて。

とはいえ、いつまでもそうするわけにもいかないのでラッピングを解いて中に包まれたチョコを見る。

見た目の時点で6個全部にそれぞれの特徴が出ていて、丁寧なつくりになっているのもチョコに込められた気持ちがすごく伝わってくる。

何故かそれらに何処か既視感を覚えたが、それも友奈姉が作ったからだと思う。

一瞬そんな考えが頭の片隅を過つたが、気にしない事にして一口ずつ食べていく。

「美味しい……!」

まず出てきた言葉がそれだった。そこからは無言でひたすらに、でも美味しく味わっていた。

そうして気が付けば全部なくなっており、食べた事が嘘のように思えるけど口の中に残る甘さがそれを事実だと示していた。

今年もありがとう、みんな。

『それでそれで私のチョコの感想はどうでしたか、奏音さん!』

『落ち着きタマえ、杏!』

『でも気持ちは分かるなく 奏音くん、あんなに美味しそうに食べてくれたし』

『そう……ね、私も嬉しかったわ』

『ああ、私も頑張ったかいがあったものだ』

『ですね、それにチョコ作りに一生懸命な若葉ちゃんも見れて大満足です』

「え、みんな!」

突然聞こえてきた声に思わず声が出る。みんなの気配に気付けないほどにチョコに夢中になっていたらしい。

『とにかくだ、杏。まずは言うべきことがあるだろう?』

『あつ……そうでしたね！ ごめんなさい、つい舞い上がっちゃって』

『大丈夫だよ、アンちゃん。今からでも間に合うよ！』

『ええ……これは外せないわ』

『よし、それならタマ達で一斉に言おう』

『そうですね、それでは』

ひなた姉の音頭に合わせてみんなが自分の方を見る。みんな自然な笑顔を浮かべながらバレンティンを象徴する言葉を口にする。

『せーの』

『ハッピーバレンティン！』

結城友奈の章

ある日の朝のこと

普通っていう単語の定義は何なのだろう、なんてふと思ったことがあった。

本を読んでいる時だったか、授業中だったか、もしくはテレビを見ている時だったか。それがいつだったかはさっぱり思い出せないけれど、それってつまりそれ自体はあまり重要な事じゃなかったという事だと思う。

じゃあ、実際には何をもって普通と言うのかな？

両親がいて、友達がいて、楽しい日常をすごせていること？

特異な才能や変わった所もないこと？

他にも色々と有りそうだけど一旦この辺で。

要するにそれに明確な基準があるのかは分からない。

だけど、少なくとも世間にとつての“普通”とその人にとつての普通が違うものであることだけは確かだ。

なら自分の場合はどうなんだろう、なんてふと考えてみたんだけど……

『どうした奏音^{かのん}、何か考え事をしているようだが悩み事でもあるのか？』

『そうなのですか？ もしそうなら私達に相談してくださいね？』

『その時は遠慮なくタマ達に頼りタマえ！』

『そうですね、一人で悩んでも解決しないことは多いですから』

『うんうん、遠慮なく頼って欲しいな！』

『あなたも好かれてるわね……まあ、私も聞いてあげるくらいなら出来るけど』

少なくとも自分にとつての普通が世間からすれば絶対に“普通”では無いことだけは間違いないと思う。



何時からどうしてこうなったのか実際のところ理由や原因なんて分からない。

気付いたら彼女達が見えて、普通に話せて。

両親は最初は驚いていたけど、そんな自分に怖がることなくそれが自分の個性なんだって受け入れてくれて。

そうこうしている間に彼女達の存在を何も不思議に思わなくなっていた、というよりも自分にとってはそれが当たり前のことだった。

神樹様や殺人ウイルスなんてものが存在するのだから幽霊と言葉を交わしても何も

可笑しくはない……はず。

「どうしたの、奏音くん」

「あつ、おはよう樹ちゃん。ちよつとした考え事だけど大した事じゃないから大丈夫」
「そうなんだ、何かあつたら私じゃなくても誰かに相談してね」

あの人達もそうだけど自分の周りにいる人達は皆優しい。それがどれだけ恵まれて
いることか以前聞かされた事があつた。

ただ千景姉レベルで周囲の環境が悪かった人も早々いないとは思うけど絶対にそんな事は口にしない。

態々千景姉を悲しませることを言う必要性がないから。

「今日も部活？」

「うん、お姉ちゃん達と一緒に幼稚園で劇をやるんだ」

「劇かく、樹ちゃんは何か役をやるの？」

「私は……音響係かな。お姉ちゃんと友奈さんが役をやるんだ」

樹ちゃんの所属する勇者部は一年前に設立されたばかりの部だけど、その活動故に地域では結構有名な部になっている。

樹ちゃんのお姉さんの風さんが部長で、二年の先輩が二人に樹ちゃんの合わせて四人が部員として“世の為、人の為に”をモットーに活動している。

その活動は砂浜でのゴミ拾いから運動系の部活への助っ人、猫の親探し、果ては老人ホームや幼稚園での劇やレクリエーションと色々ある。

『世の為、人の為にボランティアをね……私には無理そうね』

『そうかな、ぐんちゃんも出来るよ!』

『高嶋さん……』

なんだろう、この少し甘ったるい感じは。いや、二人が友人なのは良く伝わってくるし、良いことだとは思っただけ。

『ふふ、奏音さんもこちらに興味を示してみませんか？ 私厳選の参考資料ならいくつかあるので』

『ちよつと待ちタマえ、杏。奏音にはそちらの道はまだ早い!』

『もうそんなことはないよ、タマつち先輩。こっちは奥が深いんだから精々入門編ぐらいだよ』

……ああもう、自分は一旦樹ちゃんとの会話に集中するから皆は好きに話してて!

そんなー、なんて杏姉の残念そうな声を聴きながらすぐに樹ちゃんの方に意識を向けると、少し心配そうにこちらを見ていた。

「奏音くん、大丈夫? 何だかぼーつとしていたみたいだけ」

「ごめんね樹ちゃん、実は昨日夜遅くまでゲームしていたから少し寝不足で……」

「なら先生が来るまで寝るのはどうか？ 私が起こすから」

「良いの？」

こちらの質問に頷いて大丈夫と伝えてくる樹ちゃん。

本当の理由ではないとはいえ、実際昨日千景姉と新作のRPGで盛り上がって寝不足なのも事実で。

だから彼女の提案はありがたかった。彼女がOKだと言ってくれているから起こしてもらおうよう頼んでも問題ないってことになる。

「ありがとう樹ちゃん、先生来たら起こして。おやすみー」

「うん、おやすみ奏音くん」

そうして自分は机に突っ伏すと思ったより体は疲れていたのか、すぐに意識は薄れていった。



「すぐに寝ちゃった……よっぽど眠かったんだね」

隣の机にてぐつすりと眠る奏音くんの寝顔を見る。

中性的な顔立ちの奏音くんはこうやって眠っているときは女の子にしか見えない。

男の子にしては少し長めの色素の薄い髪が余計にそう見せているのだと思う。

まだ私たち以外誰もいない教室で奏音くんを起こさないようにそつと撫でるように髪を触る。

「髪の毛、さらさらだなあ」

その髪は男の子と思えないほどでさらさらとしていて、思わずずっと触っていたいくらい。

そんな奏音くんを私が独り占めしていると思うと恥ずかしいけどそれ以上に嬉しかった。

「ん、んん……」

「か、奏音くん!? ど、どうしよう……」

起こしちや不味いよね、だったら髪を触るの止めなきやだけど止めたくない。

ゲームに熱中で寝不足なのにここで起こしちやったら、間違いなく後の授業に響く。

「え、えつとこういう時は……取りあえずタロットで……」

一先ず鞆から取り出したタロットカードで占うことにしたけど、何を占えば良いんだろう。

奏音くんがすぐに起きるかどうか? それとも奏音くんの髪を触り続けて良いか? かな。

「ひな……、そろそろ……だから……」

「奏音……くん？」

何て悩んでいると奏音くんの声が出て、起こしてしまったかと思つて恐る恐る見たけど変わらないうち寝てた。

さっきのはただの寝言だったらしい。

起こした訳じゃないのはちよつと一安心で正直なところほつとした。

一旦中止した奏音くんの髪を触ることを再開し、ぐっすり眠る彼の顔をじつと見つめる。

たったそれだけの事なのに私にとってこの時間は凄く楽しいものだった。

「奏音くん」

目の前の友達の名前を言葉にする。

「奏音くん」

讃州中学に入って出来た最初の友達。

「奏音くん」

声をかけてきたのは彼の方からだったけど、それでも私が自分の意志で歩み寄ろうとした男の子。

まだちゃんと友達になつてからそんなに時間が経っていないけど、これからもつと一

緒に過ごしたい。

友達としてもっと遊びたい。

「楽しみ……」

そんなこれからの学校生活に期待を寄せて。

担任の先生が来るまで、奏音くんをずっと見ていました。

流石にクラスメイトが来てからは恥ずかしいから髪を触るのは止めたけど、それが少し残念で。

また明日になれば触れるかも、何て密かに思ったりもしています。

ある日の昼のこと

午前の授業の終わりを知らせるチャイムが教室に響き渡る。

それは同時に昼休みの始まりの知らせでもあるのだから少し不思議だ。

「はい、今日の授業はここまでですね」

社会を担当するその先生は黒板に書く手を止めてチョークを置く。

まだ終わっていないとはいえクラスメイトの皆の雰囲気も少しほっとしたものになるのも当然だと思う。

「犬吠埼さん、号令を」

「あつ、はい！ 起立、礼、神樹様に拝」

今日の日直の樹ちゃんの合図にそって皆でいつもの挨拶をする。

幼稚園の頃から神樹様への挨拶は欠かさず行わされてきたので自分としてはいつもの事で。

でも、皆からしてみれば違和感があるらしい。

それにしても神樹様かあ……

『どうしたのですか、奏音さん？ 神樹様のことでは何か気になる事でも？』

いや、ひなた姉は神樹様の声を聞く巫女だったんだよね？

『はい、頻度は多くなかったですけど神樹様からの神託は何度かありました』
実際、その神託ってどんな感じなのかなって。

神樹様の声を直接聞くことの出来るテレパシーみたいなの？ それとも何か未来の情景を見せられるの？

『そう言えばタマ達もどうなのか聞いたことはなかったぞ。教えてくれ、ひなた！』
『そうですね……イメージが送られてくるって感じですね』

それって結構ふんわりしたものなの？ それとも謎解き系？

『それならふんわり系ですね。それを私達巫女が解釈するといった感じになります』
成る程……つまりふわふわした神託を巫女さんがふわふわ解釈をする。

うん、これ以上は頭がパンクしそう。

でも可笑しい、普段はもう少し頭もまともに働くはずなのに。

『いや、それは奏音が空腹だからだと思っただけ……』

あつ……昼御飯食べるの忘れてた。

通りで頭が少しふわふわしてるんだ。

『でしたら続きは食べ終わってからにしましょうか。樹さん達も一緒に食べたがついてますよっ。』

それは大変だ、と思つて自分の机の上を見てみると既に自分の弁当が広げられていた。

もしかして……

『えへへ、私が広げといたんだ。奏音くんがすぐに食べれるようにと思つて』

そつかあ、また使つたんだ友奈姉。

準備してくれたのは嬉しいけど、使う時は前もつて言つてね？

はい、つて言う友奈姉の声を耳にしながら周りを見る。

樹ちゃんをはじめに良く一緒に昼御飯を食べるクラスメイトの子達が集まつており、既に食べ始めていた。

「奏音くん、お昼食べよう?」

「そうだね、樹ちゃん」

家の人に作つてもらつた弁当を開ける。

その中身は見た目からして美味しいと思わせるような盛り付けがされていた。

ふりかけのかけられたご飯に卵焼きや唐揚げ、ソーセージといったおかずがドレッシングのかかったサラダなんかがあつた。

「頂きます」

軽く手を合わせてからその中でまず最初に卵焼きの一つを箸でとつて口に運ぶ。

甘味が効いた感じが好きな自分としては文句なしの出来で美味しい。

出汁巻きも嫌いではないけどやっぱり甘めの方が好きだ。

そんな風に食べていると幾つかの視線を感じたので、そっちに目を向ける。

何人かがこっちに向けて期待の視線を向けていた。

「奏音、何時も通りお願い！」

「えっと、交換だよな？ ちょっと待ってて」

開けていなかったもう一つの弁当の蓋を開けて皆の近くに置く。

開けた弁当から皆がそれぞれ思い思いのおかずを取っていく。

この為に少し無理を言って多めに作ってもらっているけど、やっぱり皆が美味しそうに食べているのを見ると自分で作ったわけではないが嬉しくなる。

「ん〜、やっぱり奏音の弁当は美味しいな！ あっ、おかずを置いていくぞ」

「そうね、私も置いていくわ。あと卵焼き美味しかったわよ、ありがとう」

そして何より楽しいのが交換で貰ったおかずを食べることだと思う。

味の好みに合わないことも有るけど、其々の家の家庭の味の一端を楽しめるのが良い。

あつ、この煮物結構美味しいな。むむむ……このハンバーグも良いかも。

『なるほどなるほど、奏音さんはそういう味付けもお好みと……』

なんて風に昼御飯を食べているとくいつ、と制服の袖が掴まれる。

そちらの方に顔を向けると樹ちゃんが少し緊張した様子でこちらを見ていた。

「あつ、あの……」

「どうしたの樹ちゃん」

「こ、これ……を……うう……」

『こ、これは……もしかしてのもしかしてだよ、タマつち先輩！』

『ええい、一旦落ち着きタマえ杏！』

頑張つて、球子姉。こうなった杏姉は大変だけど、抑えられるのはあなただけだから。なんて二人の会話を聞いている間に緊張が解けたのか、自分に向かって小さめのタツパーを渡してきた。

えつと、それつてもしかして……

「こ、これを……良かったら、食べて貰えます……か？」

『樹ちゃん、可愛い……！』

うん、杏姉は少し静かにしてて。



私、犬吠埼樹は今までで一番緊張しています。

きっかけは奏音くんと一緒にお昼を食べるようになった時のことで、あの時はお姉ちゃんに作ってもらったお弁当のおかずと交換することになって。

奏音くんは美味しいと言って、喜んでくれたのが嬉しかった。

それが何度か続いたある時、こう思いました。

私も何か奏音くんに作ってあげたいなって。

でも私一人じゃ何も作れないから。

それでお姉ちゃんや勇者部の先輩の皆さんに協力してもらって、漸く作れたのがこのタッパーに入っている肉じゃが。

「うん、勿論良いよ……へえ、肉じゃがなんだ」

「う、うん」

何度も失敗して作り直して、それでやっとお姉ちゃんからOK貰えたやつだから不味くはないはずだけど。

友達に何かを作って渡すのがこんなに緊張するなんて思ってもみなかった。

「じゃあ、頂きます」

そう言つて奏音くんは形の崩れたジャガイモを口に入れる。

緊張で胸がドキドキして喉がからからになってしまいそうで。

奏音くんの口から味がどうか聞くまでの時間がとても長く感じられて。

そして……

「うん、美味しいよ樹ちゃん」

えっ、喜んでもらえた……？ 嘘じゃないよね……？

私が現実だと理解できない間にも奏音くんはニンジンやお肉、白滝を食べていく。

漸く私がそれを現実だと理解できた頃には奏音くんは既に食べ終わっており、渡したタッパーを返してきた。

「どの具も良い感じで出汁がしみてて良かったよ、ありがとう」

「良かったあ……」

嬉しくて嬉しくて、ついつい顔がにやけそうになるのを何とか抑える。

後でお姉ちゃんと友奈さん達にも上手くいったよ、って知らせないと。

何て思っているかと奏音くんは私の顔をじっと見て何かを呟く。

「奏音くん、今なんて……」

「ああ、ごめん樹ちゃん。何でもないんだ、いや本当に」

そう言つて奏音くんは少し恥ずかしげに顔をそらす。

えっと、奏音くんは何を言ったのかな……？



『しかし随分あの娘とイチヤイチヤしてたわね』

「いや、イチヤイチヤって……自分と樹ちゃんはあくまで友達だよ」

『そう……まあ、あなた達がそういうなら良いけど』

あの後、皆で昼食を食べ終わってまだ午後の授業まで時間があつたから彼らに断りを入れて一人屋上にいた。

今は他に人もいないから千景姉と口に出して会話している。

「ねえ、ところでひなた姉。さっきの話の続きだけど」

『そう言えばそうでしたね、でもどうして巫女について聞きたいと思つたのですか?』

「いやさ、樹達の部活って勇者部じゃん」

それは今までは敢えて聞くことを避けていた話題。

若葉姉達わかねえの話の嘘だとは思つてはいないけど、彼女達がそうだとは思いたくなくなつた。

でも、もうこれ以上目を逸らしてはいけない気がしてきたから聞く。

「それって若葉姉達の言つていた勇者だよな?」

『そう……だな、まだ端末が起動していない以上勇者候補とでも呼ぶべきだが』

『ですが若葉ちゃん、あの中に友奈さんもいる以上ほぼ確定かと』

「そっか……」

この空が、いやこの偽りだらけの空を今日ほど憎く思ったこともない。

どれだけ自分が何かを思っても勇者でない自分では何も出来なくて。

だから……

「ねえ、皆」

『どうしたの?』

「もし、もし樹ちゃん達が本当に勇者になって戦うことになったら……」

『うん』

「その時は手助けしてあげて」

静まる皆の声。

忘れがちだけど皆は既に過去の人間で、このお願いもただの我が儘に過ぎなくて。

叶うはずもない傲慢な想いに過ぎないのに。

『私は樹海化した世界では何も出来ませんから私では答えられません。なので若葉ちゃん、お願いします』

『ああ、そうだな。奏音、お前も分かっているように私達は既に過去の人間。直接的な干

『渉は不可能だ』

「うん」

『それでも出来る限りは何とかしてみよう』

『あいつらの事はタマに任せタマえ！』

『そうですね、私も奏音さんと樹ちやんの恋模様を眺めていたいので』

『任せて、奏音くん！ 私にとって樹ちやん達はある意味で後輩だから』

『あなたのお陰で高嶋さんとうこうして話せているから……その恩返し位はするわ』

「ありがとう、皆」

やっぱ自分は恵まれている、と改めて思った。

こんなにも強い人達に支えられていることの有り難さを強く実感した昼休みだった。

影ときどきサンチヨ

ちよつとした我が儘を聞いてもらえた日の放課後。若干の眠気を堪えながら受けた授業も終わり、クラスメイトを含めた全員が少しほつとした様子をしていた。

「劇頑張つてね、樹ちゃん」

「ありがとう、奏音くん。私、頑張ってくる」

そんな短い会話を終えた樹ちゃんは日直の仕事の後、部活の一環として幼稚園に向かつていった。

さて、自分はどうしよう。特定の部活に入っていない自分はクラスメイトと遊ばない限り、放課後は基本的に暇だ。

そういう時は若葉姉達と色々することが多いのだが、昼休みが終わつてからどうも皆忙しいらしい。

十中八九さつきの我が儘が原因なのだろうけど、少し寂しく感じてしまうのはやっぱり傲慢なのかな。

なんて考えながら自分のスマホを弄っているとメールが届いていた事に気が付いた。家からかもしくは友達からかと思つて確認してみると全く予想していなかった人か

らのものだった。

件名：会いたいなあ

差出人：そのねえ

突然だけど放課後に私のところに来てほしいんよ。

迎えの人はかののんの学校の校門で待ってもらっているから。

よろしくね。

うん、気のせいかな。どうも疲れがまだ取れていないからか幻覚が見えるようになってみた。

『気持ちには……痛いほど分かるけど……現実よ』

そっかあ、現実かあ……ところで千景ちか姉ねえは良いの？

千景姉も何かすることがありそうだけ。

『それなら……問題ないわ。まだ始まっていない以上……現時点で動けるのは乃木さんや高嶋さんくらいよ』

ああ、確かに若葉ゆ姉ねえや友奈ゆ姉ねえは動けておかしくないよね。

……あれ？

『どうしたの……何か違和感でも感じたような表情をしているわよ』

いや、どうしてあの二人だけが動けることをすんなりと納得したのかなって。

多分いつもの直感なんだろうけど少し不思議で。

『……………』

でもそういうこともあるのかも。

取り合えず今はさっきのメールに書かれていた通りに校門に向かうのが先決かな。

あまり遅いと自分のために待たせてしまう事になるし。

そうして下駄箱で靴に履き替えて校門に向かうと、校門から少し離れたところに大赦の紋章が目印となっている車と大赦の神官であることを示す仮面で顔を隠した女性がいた。

校門の近くであることもあって下校しようとしていた生徒達がちらちらと見ていた。

そこで露骨に騒がない辺りは大赦の名前が効いているのかな。

そんな事を考えながら女性の方に近付いくと、自分に気付いたのか女性はこちらへ向き直る。

「お疲れさまです、園子様からの連絡は受け取っておられますか？」

「はい、ついさつきでしたが何とか」

「でしたら詳しい説明は到着した後に行いますので一先ず車にお乗りください、乃木奏

音様」

ああ、まだ慣れないな。

そんな風に思いながら女性の案内にしたがって車に乗り込む。

ふかふか、だなあ……

乗り込んだ車の後部座席のふかふかき具合に治まったと思った眠気がぶり返してくる。

『乃木くん』

千景姉……？

何か……ある……ふわあ……

『着いたら……私が起こすから……それまで寝ていなさい。昨日は……夜遅くまで付き合わせてしまったから……それくらいわね』

自分も……楽しかったから……気にしなくて良いのに。

それに……寝すぎて夜寝れなくなっても……困る……

『あなたに限って……それはないと思うわ。だから寝ておきなさい』

なら……そうするね……おやすみ、千景姉。

『おやすみなさい……乃木くん』

何処か優しい彼女の声が微かに耳に入ったと時を同じくしてその意識は眠りへと

向かっていった。



気付けば夢を見ていた。

「どうしたの、ぼーっと外を見ていたみたいだけど何か面白いものでもあった？」

「ううん、そういうのではないんだけどなんとなく……かな」

「そういうところは本当にアンタらしいわね、アタシには良く分からないわ」

「そうかな、■■もやってみたら案外はまるかもよ。それに……」

それは自分と一人の少女が会話しているという夢というにはあまりにもありきたりすぎるもの。

なのにそんな光景を見てまず抱いた感情は懐かしさだった。

それも思わず涙を流してしまうほどに。

何故そんな風に思うのか自分にも分からないけど、きっとそれはその夢が良い夢であることの何よりの証明なのだろう。

『お……、乃……ん。もう……』

千景姉の声が聞こえる。

もう起きないといけないと思いつつもこの夢から覚めてしまうと考えると躊躇いが出てきてしまう。

それでも今の自分が優先すべきなのは夢ではなく現実だから。



そんなことを考えながら目を覚ますと自分を乗せた車は停まろうとしており、窓からは見慣れた駐車場が見えていた。

『おはよう、乃木くん。夢見は……どうだった？』

こちらを窺うような表情をした千景姉の視線を辿つてふと目元を触ると、一筋の涙がいつの間にか流れていた。

ああ、なら心配させちゃって当然かな。それでも今は優しい彼女を安心させようと言葉を口に出す。

良かったよ、とても……良かった。

『そう……なら、良かったわ』

少しほっとしたような表情をした千景姉の顔をみて、どうやら上手くいったようで良かった。

なんて思っていると車は完全に停まり、運転をしていた神官の女性是对して着いて来るように言う。

女性の案内に従つて病院を歩いていると目的の病室に到着した。

「園子様、今よろしいでしょうか？」

『どつどつ』

扉越しに聞こえてきた何処か気が抜けてしまうような声が了承の意を告げると、自分と神官の人は病室の中へと入って行く。

「かののん、久しぶりだね〜」

注連縄が張り巡らされた病室のベッドの上にその少女はいた。

体のあちこちに包帯が巻かれた彼女はこの病室に漂うどこか神聖な空気に相まつて、まるで神様のような印象を覚えてしまう。

でも、それは違う。そんなことを彼女は——そのねえはそうなる事を望んでなんかいなかった。

「久しぶり、一か月ぶりぐらいになるのかな」

「そうだね〜、学校は楽しい？」

「寝たきりの彼女は自分との会話を続けたくて仕方ないと言わんばかりに会話の続きを促してくる。

もしかしてと思っただけど……

「今日そのねえが会いたいわって言ってたのはそれが目的？」

「それも一つかなあ。今書いている小説のネタが欲しくて〜」

まあ、らしいと言えればいいけど。

でも断る理由もないから、ベッドの近くに置かれた椅子に座ってそのねえに話し始めた。

学校の授業の事やクラスメイトの事、そして友達である樹ちゃんのこと。

話始めるとそのねえも楽しそうに聞いてくれるものだから、つつい色々話してしまふ。

一通り話終わると時間があつという間に経っていて、少し喉が渴いてきた。

部屋の隅で待機していた神官の人が注いでくれたお茶で喉の渴きを癒す。

「ふう……大体こんな感じかな」

「うんうん、ありがとうね〜 かののんがスクールライフを楽しんでいるのが私にも伝わって来たんよ〜」

目をキラキラ輝かせながら自分の話を聞いたそのねえは本当に嬉しそうにしていた。

讚州中学に入學してまだ一か月も経っていないからそんなに話せることもなかったけど、それでもこんなに喜んでくれるとこちらも嬉しくなってくる。

「それでかののん、聞いていて思ったんだけどね〜」

「何か気になる事でもあった？」

「樹ちゃんだっけ、その娘とはどうなの〜？」

そのねえに聞かれたことに思わずまたか、と思ってしまうた。

昼休みに千景姉にも聞かれたけどそんなに樹ちゃんと自分はそんな関係に見えるの
だろうか。

「どうなんだろう……友達だとは思ってるよ」

「それでそれで」

「でも、それ以上かって聞かれると良く分からない……かな」

自分にとって樹ちゃんはクラスメイトの一人で大切な友達で。

引っ込み思案で自分に自信がなくて良く風さんの後ろに隠れがちで。

それでも優しくて、話していると楽しくて。

そんな彼女との毎日はともかけがえのないもので。

でもそれを友情以上のものとは自分には思えなくて。

そんな自分の様子にそのねえは微笑んでいた。

「これから期待かな〜」

「……そのねえには敵わないなあ」

「これでも一応かののんのお姉さんだからね」

まるで胸を張ってえっへん、と言っているようなそんな声色で彼女はそんなことを言った。

そうして彼女にとって一つ目の目的は済んだのか、さっきまでのほんわかな様子から真剣な表情へと変わった。

大赦の神官たちから崇められる勇者としての顔へと。

「それはそうとそろそろもう一つの目的の方も済ませないとね」

「もう一つって……まさか」

「うん、神樹様からの神託によるともうすぐはじまるみたいだけど……かののんはどうするの?」

そのねえ——自分の義姉である乃木園子は真剣な表情でそう尋ねてきた。

その返答に虚偽は許されない、と云わんばかりの威圧感がそこにあった。

だから——

「自分は……」

今の自分の本心を嘘偽りなく伝えた。